

あらえびす賞

耳を揺らす 心を揺らす

金子 央

雷が落ちた！

ティンパニが、突然荒々しくF音を連打し始めた。それまで流れていた音に比べて間違いなく最大音量だ。弦楽器群がそれに負けじとかき鳴らすのだが、バランスのことなどお構いなしに叩き続ける。あれ？F音だと思っただが、音がずれている？チューニングを無視しているかのような、周囲と調和しない音になっている。リズムもどこか不規則になっているように感じる。音空間が一変して、一瞬パニックになった。雷が落ちた、本当にそう思った。

ベートーヴェン作曲の交響曲第六番「田園」第四楽章「雷雨、嵐」。それまで、穏やかな田園風景を思わせる穏やかな音楽が続いていたのだが、突然その雰囲気打ち破るような轟音がした。第三楽章「田舎の人々の楽しい集い」から間を空けずに演奏されるので、余計に突然のように感じたのかもしれない。啞然としているうちに、聴き覚えがある旋律が流れ、また穏やかな音空間が戻ってきた。第五楽章「牧歌 嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」だ。しかし、あの雷が耳の奥に強く残り、演奏が終わった後も、「あれは何だったんだ」という思いをしながら会場を後にした。

実は、私はこれまで「田園」をきちんと聴いたことがなかった。有名な旋律を断片的に知っているだけだった。そんなある日、地元のホールにオーケストラアンサンブル金沢（OEK）が来て、広上淳一氏の指揮で「田園」が演奏されることを知った。ここは敢えて予習をせず、新鮮な気持ちで楽曲と出合ってみようと考え、コンサートに出かけたのだった。予備知識がなく第四楽章に接したことも、驚愕した一因だろう。

あの有名な旋律で始まる第一楽章「田園に到着したときの愉快的な目覚め」。OEKの弦楽器群は流石のアンサンブルで、「このホールってこんなによく響いたっけ？」「と思っほび、豊かで美しい音色が客席を包んだ。第二楽章「小川のほとりの情景」で鳥の鳴き声を模した木管楽器など、管楽器群も弦楽器と寄り添うかのようにやわらかな表現を続けていた。広上氏のタクトは、

踊るような動きで、オーケストラを流暢に歌わせているかのようだった。ああ、今とても贅沢な空間に身を置いているなあ、と思いながら聴いていた。そこへあの衝撃だった。

しかも、このティンパニストは前のプログラム（ベートーヴェン作曲 ピアノ協奏曲第五番「皇帝」）では独奏。ピアノや弦楽器群と弱音で丁寧に掛け合いをするなど、非常に繊細なアンサンブルをしている様子が印象に残っていた。このギャップもすごかった。そう考えると、「田園」を演奏する前からの、この場面向けての布石だったのではないかとも思えてきた。

後日、会場にいた友人たちと感想を交わしたが、あの雷の音でビクッとなった聴衆が結構いたようだ。それだけの衝撃だった。きっと私も周囲の人に分かるほどビクツとになっていたに違いない。

さて、コンサートを終えてから、どうしても気になり、CDで「田園」を聴いてみたくなった。違つ指揮者の演奏で数枚鑑賞したが、どれも「あの日ほどのエネルギーではない」と感じてしまった。もちろんどのCDも表現力はあるのだが、弦楽器や管楽器とバランスをとって録音しているように思えた。あのパフォーマンスは、それこそ「ライブ」だった。視覚的要素や効果音ではなく、音楽のみでここまでリアルな表現と出合えることはなかなかない。私は、大げさでなくホールで「大自然」を感じた。観光で絶景を見た時に感じる、ある種のエネルギーのようなものを感じ取った。

つまり私は、オーケストラのつくる音空間によって、耳を揺らされ、そして心を揺らされたのだ。田園の風景を描いた心地よい響きが耳に届き、心を穏やかにする。突然の風が起る衝撃的な響きが耳に伝わり、心がざわつく。そのリアリティが感情を動かすのだ。

そう考えると、そういったことを狙って作曲したベートーヴェンのすばさ、それをもとに計算し尽くしてパフォーマンスを構築した指揮者と奏者のすごさを改めて感じた。OEKは決して大きなオーケストラではない。にもかかわらず、こんなにも振れ幅の大きい音楽表現に出合うことができ、貴重な経験ができた。

自分も時折演奏する側に携わることがあるが、聴き手の耳を揺らし、心を揺らす表現ができているだろうか、という視点でこれまでの活動を振り返っ

てみると、まだまだ考慮する余地がたくさんありそうだ。
ひあ、また耳を揺らし、心を揺らし、今までのような感情と出合えるような
演奏に接するのと同じよう。今度は何を聴きに行こうか。

曲名 交響曲第六番 田園
作曲 ベートーヴェン

審査員講評

あらえびす賞感想文について

「雷が落ちた!」と思わせるティンパニの連打への
驚き、CDでは得られない生の音楽の感動が伝わって
きます。そして、聴き手と表現者の両面から音楽に関
わる奥行きのある生活が垣間見えました。これからも
様々な音楽に耳と心を揺らし、より豊かな人生となる
ことを願っています。

教育長賞

愛せる人間になるために

小坂 桃香

星が水飛沫と共に舞う光景が、「献呈」を聴くたび見える気がする。幻術のような優美さに、私は圧倒されてしまう。

高校の現代文の授業で、当時読んでいた評論の理解を深めるため、美しいと思うものを持ってくるように言われた。そして、同じ班の人が聴かせてくれたのが、この曲のピアノ演奏の音源だった。星がキラツ、キラツと銀色の光を反射しながら、川に乗って流れていく。そして川の傾きが急になるところで川岸に水が強く打ち付けられ、星が飛び跳ねて瞬く。初めて聴いた時そんな映像が頭に浮かび、私は一瞬で魅了された。それから私は、折に触れてこの曲に身を委ねた。星が飛び跳ねて瞬いた後は、白い日差しに満たされた、初夏の午後の光景に切り替わる。その温さと匂いに陶醉しているうちに、星を溶かし込んだ波が打ち寄せ、その光景を攫っていく。そして波があちこちにぶつかって飛沫を上げるたび、波に蓄えられた星の粒子が、序盤よりも躍動感をもって忙しく明滅する。最初から最後まで、ただただ幸せな夢の中にいるようだった。

この美しい曲は、どんな背景があって作られたのだろう。調べてみると、作曲者であるシューマンが、結婚前夜に恋人に捧げた曲らしい。さらにこれは、歌曲をピアノ演奏用に編曲したもので、原曲はドイツ語の詩に、シューマンがメロディーを合わせて作ったそうだ。歌曲も聴いてみると、ピアノ用に編曲したものよりも直情的な印象を受けた。自分の心の拠り所として相手がいってくれる喜びを、高らかに、希望に打ち震えるように歌い上げている。一方で「あなたは私の憩い」「天からの授かりもの」のように相手を慈しむ言葉は、鎮めるように、癒すように歌っている。ある時は心をかき乱され、ある時は安らぎも覚えるほど、相手に心を奪われているのだろう。情熱を秘めつつ、抑えきれない想いが滲み出るようなピアノバージョンも、感情を堂々と表現する歌曲バージョンも、祈りのような気高い愛だった。

今までうつとりしながら聴いていたこの曲の純真さを知って、正直なとい

ろ、私は居た堪れなくなった。自分の人としての小ささをありありと見せつけられた気がしたからだ。私はこの曲のように、無垢な愛を惜しみなく差し出せる人間ではない。自分の身を削ることではしか愛を与えられないため、私の愛には「献身せずにはいられない、歪な心を抱えて生きていくことに気づいてほしい」という邪な気持ちが絡み付いてしまう。なんて悲劇のヒロイン気取りなんだろう、あまりにも痛々しい。

今までは、私に真っ直ぐな愛し方は出来ない、私はこんな愛を与えられる人種じゃないと諦めていた。むしろ、私の愛だってれっきとした愛じゃないか、何が悪いんだ、と開き直ってすらいた。しかし、この曲の清廉さを味わううち、「私も愛おしい人にこんな澄んだ愛を贈ってみたい」と憧れのような感情が芽生えた。もし、温もりに満ちた愛を持ち寄って、穏やかな幸せを二人で編み上げることが出来たら、どれほど素敵だろうか。シューマンもきっと、そのような日々を心に描いて恋人にこの曲を捧げたのだろう。祈りのような、誓いのような気持ちで。ならば私も、包み込むように相手を愛せる人間になりたい。愛してほしいと求めるだけでなく、私の愛で相手を力づきたい。

改めて「献身」を聴けば、誰かを愛せる人間の凛々しさに焦がれる。私はそんな人になるために、いや、なってからも、そうあり続けるために、この曲を聴き続けよう。

| | |
|----|----------------|
| 曲名 | 献身 |
| 作曲 | フリードリヒ・リヒャッケルト |
| 作詞 | ロベルト・シューマン |

優秀賞

パストラーレ

竹澤 恒敏

ベートーヴェンの交響曲第六番『田園』は、少なくとも二〇年以上前から毎年5月にNHKクラシック音楽番組に必ず登場する。『第九』として冬の季語にもなっているベートーヴェンの交響曲第九番『合唱付き』と合わせて「新緑の田園、年末の第九」といったいいほど広く親しまれている曲だ。また学生オケでピアノを経験した私にとっては、一番思い出深く、印象に残っている作品でもある。半世紀近くたったのに、ふと気が付くと頭の中を『田園』のメロディーがめぐるということが少なくない。

最初に『田園』と聞いたとき、まず浮かんだのは田んぼが広がる光景だ。第一楽章の「田舎に到着したときの愉快的感情の目覚め」は、五月晴れの空のもと、水の張られた大きな田を、そして第二楽章の「小川のほとりの情景」は田の畦道に沿って日光をきらきら反射しながら流れる清流を想像した。実際、CDジャケットやビデオ映像でも日本の農村風景が紹介されていることが多い。NHKが毎年5月に放送するのも同じ流れだろう。

ところが調べてみると、ベートーヴェンが『田園』を作曲したオーストリアのウィーン郊外、ハイリゲンシュタットには当時も今も田んぼなどないことがわかった。ベートーヴェンが見たのは森と森の中を流れる小川だったのである。ベートーヴェンが『田園』で表現したかったことをもっと深く考察せずにはいられなくなった。

ベートーヴェンが記したドイツ語“Pastorale”は、今から見ると「理想郷」と表現したほうが近いようだ。曲には自然への畏敬、感謝があふれているし、楽しい集いも表現されている。現実には存在しない空想の世界だ。日本語訳として我が国の田園風景は具体例の一つと考えられるもの、ベートーヴェンが見ていた光景とは大きく異なる。むしろ日本の田園風景という固定されたイメージは、曲の無限に広がる世界の理解の妨げになるようにさえ思われる。我が国での表記を『田園』から『パストラーレ』に変え、聞いた人それぞれのイメージの広がり任せたほうがよいのではないだろ

うか。

次に実際に郊外の森に入ってみた。自然の描写が最も精緻に表現されている第二楽章「小川のほとりの情景」を完全に理解、経験できた。ベートーヴェンが最も表現したかったことがわかった。

多くのクラシック音楽作品で使われ、『パストラーレ』でも適用されているソナタ形式は、提示部、展開部、および再現部の三つからなる。最初の提示部では主題メロディーが現れる。続く展開部では、提示部で示された主題がさまざまに変形、転調しながら、楽器を変えつつ展開していく。そして再現部では、提示部の旋律が再び登場する。一連の流れは、交響曲をはじめとするクラシック音楽の醍醐味といっている。

一方、『パストラーレ』の第二楽章。提示部では美しい旋律が流れる。しかし展開部では提示部の展開はあまり見られず、別の散発的な音型が登場する。とぎれとぎれで、展開部の終わり近くでは混沌の瞬間が現れる。続く再現部冒頭では提示部の主題が前面に出ることなく、無関係に聞こえる七つもの旋律が共進していく。醍醐味とは無縁のような構成だ。

しかし、実際に聞いてみるとその魅力に引き込まれてしまい耳から離れない。学生オケの時も、わからないものを表現しようとして取りつかれたように何回も何回も練習したものだ。

それが、森に入ってしまったら耳をすましていると、第二楽章の音楽は森そのものであることがわかった。森に入った瞬間は、小川のせせらぎ、木々の葉のそよぎ、小動物の動き・鳴き声が一斉に始まる。しかし耳が森に慣れてくると、流れていたはずの音はだんだん切れ切れなり、ついには無秩序の世界になる。展開部の終盤そのものだ。

さらに耳を澄ましていると、そここで植物、動物たちの活動音がする。それぞれ自己の生存のための動きで、みんなばらばらである。これは展開部に続く再現部冒頭で見事に表現されている。

森の生きものはみんな仲良し、といったおとぎ話ではない。森全体の調和や秩序は結果であって、意図されたもの、計画されたものでないという自然界の摂理を表現しているのだ。ばらばらの集合が森という多様性に富んだ新たな生命体となって人間を魅了し続け、そして次の命を生み出していく。

なお、実際に森を経験した上で解説を書いた音楽研究者はこれまでなかったように、あまたある解説書を紐解いてもこのような説明にお目にかかったことがない。そもそもこの部分への言及がほとんどない。しかし、こここそが核心であると思う。『パストラール』の他の楽章でも、自然を愛する一方で自然の怖さ、不可解さが出ていることからわかる。それらをすべて理解、受容した上で最後に自然への感謝にたどりついている。

自然を愛するだけでなく、緻密に観察・分析し、そして音楽に昇華したベートーヴェンの面目躍如の作品と言えるだろう。

| | | |
|----|---------|----|
| 曲名 | 交響曲第六番 | 田園 |
| 作曲 | ベートーヴェン | |